

ドイツから来たミュラー記者の

取材ノート

関西のショッピング・センターで、布団や造花の横で子犬が売られているのを見て、驚いた。子犬たちはショーウィンドーの中で眠ったり、鼻をガラスにこすりつけたりしていた。ここでは子犬は一つの商品、生きている遊び道具に過ぎなかった。

これを見て、ドイツでのことを思い出した。クリスマスの贈り物にされた子犬たちが、次の年の夏には休暇旅行に連れて行ってもらえず、道路にほうり出されることがある。こうした20万匹以上ものあわれな生き物たちが毎年、動物センターに収容される。

日本でも同じように多くの野良犬が捕まり、4日以内に所有者が現れないと、処分されると聞いた。ドイツでは動物センターが1年以上預かって、飼い主を捜すので、この点ではドイツ

犬のフン害ドイツなら罰金

の犬の方が日本の犬より幸せというべきか。

もっとも、外にほうりだされなくても、犬たちの我が家は居心地よいとは限らない。ドイツでは360万匹もの犬が高層住宅の空間で飼われ、鎖でつながれたままでない公園へ連れて行ってもらえない。そこで用便でもすれば、飼い主はすぐさま始末しないと、最高2万円もの罰金を取られる。このための、特別な「犬の警察」まであり、ケルンでは女性19人の「犬の巡視員」もいる。

日本でも、犬の住宅環境は良さそうにないが、用便の取り締まりはドイツほど厳しくない。それにもかかわらず、都心では路上に犬のフンが放置されているのはまれにしか見かけない。日本の人の方が自律心があるからか、それとも犬の数が少ないからだろうか。

目光らす巡視員



淀川堤防を愛犬と一緒に散歩する子供たち（旭区で）